

はじめに

平成23年度長岡造形大学デザイン研究開発センターの受託プロジェクトの活動報告をいたします。当年度は8件（内、1件は委託元との都合により、本報告書には未掲載）と、前年度の16件から件数を減らしました。開学の平成6年度から13年度まではプロジェクト数が3から5件で推移していたのが、平成14年度から増加し、平成19年度に37件とピークを迎えました。その後漸減し、平成23年度の状態を迎えております。

もちろん、プロジェクト件数の多寡がセンターの評価に直接関わるわけではなく、受託し応えてまいりました内容は誇れるものです。しかし、件数減少については、どのような社会・経済の変化の影響が大きいのか、今後反省と共に検証してまいりたいと考えています。

振り返りますと、平成23年は、我が国にとって東日本大震災と福島第一原発事故という未曾有の大災害に直面し、社会のあり方を改めて問い直す契機となった年ではないかと思います。東日本大震災被災地の復興には、当センターを通して中越大震災後にまちづくり関係で培われたデザインの経験を是非とも活用していただきたいと願います。

また、国際化がますます進展しております。デザインのような知的財産について、その権利が守られつつ、発展的に活用されるようなシステムについても試行しつつ開発する必要性に直面しています。

こうした社会の変化を受け止めて提案するのが、そもそもデザインの本質。社会の変化が平成23年度の当センターの活動結果に影響を与えているのであるならば、これを今後ターニングポイントであったと振り返られるように、当センターと地域のクライアントの皆様において、より一層の検討を重ねていきたいと考えております。

最後に、平成23年度委託いただいたクライアントの皆様に深く感謝いたしますとともに、長岡造形大学デザイン研究開発センターは、これからもデザインで企業や地域社会の発展に貢献できるよう活動してまいりますので、今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。

平成24年 7 月



デザイン研究開発センター長
渡 辺 誠 介

受託プロジェクト報告

ロシア市場向け新商品試作品デザイン開発業務	… 2
小国和紙用途開発事業	… 6
旧島田小学校調査業務委託	… 7
桃山邸調査業務委託	… 11
歴史的建造物調査業務	… 15
長岡市西部丘陵東地区文化・教育ゾーン 整備イメージ図作成業務委託	… 19
摂田屋地区まちづくり事業計画策定業務	… 22

デザイン研究開発センターについて

相談受付から業務終了までのフロー	… 26
プロジェクト担当教員	… 27
デザイン相談申込書	… 28

ロシア市場向け新商品試作品デザイン開発業務

発注者：日本金属ハウスウェア工業組合

受託期間：平成23年7月1日～平成24年3月31日

プロジェクト主査：土田知也（プロダクトデザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：黒崎英也（インダストリアルデザイナー）、河野高寛（大学院修士学生）、
阿部紗貴乃、遠藤沙織（以上、学部学生）

1. 背景

日本金属ハウスウェア工業組合では、経済発展が著しくライバルが比較的少ないロシア市場に着目し、平成22年から、モスクワ周辺を対象として住民の経済力や嗜好を調査してきた。ロシア市場は金融危機の克服以来、GDP向上、貿易黒字などを背景に新たな富裕層が誕生している。また寿司を中心とした日本食文化が普及しており、自動車、家電製品などの日本製品に対する高品質イメージもあることから、ロシアの富裕層をターゲットに、組合企業の技術力を生かした新商品の試作を行うことになった。

なお、本プロジェクトは「JAPANブランド育成支援事業（中小企業庁）」の一環として行われた。

2. 開発品目とデザインの方向性

日本金属ハウスウェア工業組合のメンバーとプロジェクトメンバーによる話し合いにて、開発する品目を以下の4つに絞り込んだ。

①茶 器

ロシアでは常にお湯を沸かしておき、大量にお茶を飲む習慣がある。伝統的な茶道具であるサモワール（図1）や急須、コップを取り上げる。

②酒 器

ロシアといえばウオッカのイメージが強いが、今一番ポピュラーなお酒はビールとワインである。それらに対応した金属パーツを使ったグラスなどを考える。

③別荘で使う様なカトラリー、ナイフなど

週末になるとモスクワなどロシアの大都市圏の市民は、農作業ができる質素な別荘（ダーチャ）で過ごす。その時に使用する簡単な台所用品などを提案する。

④贈答用のカトラリー

ロシアの人は豪華なカトラリーセットなどを居間に飾っていることがある。見せるための、あるいは贈答を前提としたカトラリーセットを提案する。

また、デザインの方向性としては、以下の3点を基本的な方針とした。

①他のヨーロッパ諸国からの輸入品との差別化を図るため、北欧的あるいはドイツ的なモダンデザインとは方向性を変えること。

②ロシア人の嗜好に訴えるように模様を入れるなど加飾を考える。但し、伝統的な柄をそのまま使わず独自性が感じられるようアレンジすること。

③ステンレスの塗装・発色処理など、組合企業の技術力を生かし他国が容易に真似できないものとする。



図1：従来型のサモワール

*下部で湯を沸かし、上のヤカンに濃い目の茶を入れておく。コップに茶を注ぎ、下部のコックをひねり湯を注ぎ好みの濃さにする。伝統的なものは固形燃料により湯を沸かしたが、現在の多くのものは電気による。

3. アイデアの展開

アイデアスケッチによる検討の結果、以下のアイデアを選び、CGにてレンダリングを作成した。（図2）

①サモワール卵型、②サモワール寸胴型、③急須、④ティーカップ、⑤ワイングラス、⑥鍋、⑦カトラリーセットのパッケージ

③から⑥は共通の加飾とし、統一性をもたせた。①の卵型サモワールはイースターエッグをイメージした。

●レンダリング（図2）



4. アンケート結果

モスクワで行われた見本市にてレンダリングを見てもらい意見を聞いた。なお、回答者は全て見本市に来ていた現地の方で、各回答番号は特定の回答者に対応している。回答者の年齢、性別は以下の通りである。

模倣されるのを防ぐため、レンダリングは常時飾らず回答を求めるときのみ提示している。

- ①57歳 女 ②40歳 男 ③21歳 女 ④28歳 男
⑤23歳 男 ⑥22歳 女 ⑦25歳 女 ⑧28歳 女

なお、アンケートの計画・実施は日本ハウスウェア工業組合により行われた。

1. デザインについてご意見をお聞かせください

- ①素晴らしいデザイン。60年代のレトロな雰囲気が感じられる。色使い、カタチが素晴らしい。寸胴型サモワールのアヒル？のデコレーションは最高である。
②日本のアイデンティティーは感じられない。
③面白いデザイン。直ぐに買ってお茶を飲みたくなる。サモワールの構造が面白い。
④このシリーズの中では急須が一番好きだ。
⑤黒とゴールドの配色はとても立派に見える。
⑦デザインは新しくて面白い。

2. 各提案に対し一番適切だと思う色、柄はどれか

- ①サモワールはゴールド、黒、黄色
②黒・ゴールド
③コップはゴールド、サモワールは赤、白
⑤黒、ゴールド次に赤、白
⑥急須のボルドーを除いて色使いは適当
⑦サモワールは白、急須は発色処理
⑧サモワールは黒、赤、白、鍋は黒、急須は発色

3. 購入したいと思うものはどれでしょうか

- ①ティーカップ、サモワール
②黒いサモワール、ティーカップ
③ティーカップ
④急須
⑤卵型サモワール
⑥サモワール、急須

⑦白いサモワール

⑧黒のサモワール

4. 各商品の妥当な価格はいくらだと思いますか

- ②具体的には分からないが高くしてもいけそう。
③コップは2客セットで100^{ドル}、カップ80^{ドル}
サモワール130^{ドル}
④急須 2000ルーブル
⑤300～400^{ドル}の間
⑦サモワール 3000ルーブル
急須 1200ルーブル
⑧1500～3000ルーブル

5. 試作

見本市でのアンケート結果や生産性の検討により、卵形サモワールについて協力企業にて試作が行われた。

一次試作の評価の結果、台座と本体との繋ぎの部分をより滑らかにすること、また全体にもう少し小さくできれば良い事などが指摘されたが、サイズに関しては今回は既存のパーツ、金型をフルに活用しており制限があるため、つなぎ部分の形状についての改良を行った。

さらに二次試作として、赤、白、鏡面仕上げ、発色処理の4種類が作られた。(図3) 平成24年9月のロシアにおける見本市に出品して評価を仰ぐ予定である。

6. 感想及び今後の展開について

サモワールに関しては、既存のパーツ・金型をフルに活用しながらよくここまで、イメージに近いものができたと驚いた。カトラリーなどの金属用品に関しては、日本有数の生産地である燕地区のストックは凄いものがあると再確認した次第である。

卵形のサモワールは既存のサモワールに比べてまったく異なる形でありながら、どこことなく懐かしさもあり、また適度な装飾性もあるなど、ほぼ狙い通りのデザインになったのではないと思われる。商品化に関しては、安全性の確保、サイズの適正化、コストダウンが鍵になると考えられる。

今後は、商品アイテムの増加、サモワールの改良、ロゴやネーミングのデザインなど。ブランド化を目指しての取り組みが進展することを期待している。

●卵形サモワール試作（図3）



受託事業名：

小国和紙用途開発事業

発注者：小国和紙用途開発研究会

受託期間：平成24年2月1日～平成24年3月31日

プロジェクト主査：土田知也（プロダクトデザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：遠藤沙織、金子愛、御苑早紀、西山文子（以上、学部学生）

1. 背景

小国和紙用途開発研究会では、和紙のもつ特徴を生かした商品の開発を試みてきた。今回の商品はORI KIRI HARIと名づけられた切絵遊びをアレンジした和紙を使った工作キットである。

このプロジェクトはその製品を実際に使った上でのマニュアル等の改善点の提案と、商品に添付する新たな作例を提案したものである。

2. ORI KIRI HARIについて

和紙は繊維が長いので、水で濡らした後で平らな面に貼り付けると、繊維が収縮し乾燥すると容易には剥がれなくなる性質がある。この性質を生かして、自分で切って作ったパターンを窓や鏡に貼り付け、装飾として楽しんでもらうという製品である。

なお、この提案は昨年度行われた「小国和紙用途開発プロジェクト」の一つである「ガラスマーカー」が発想のきっかけになった。

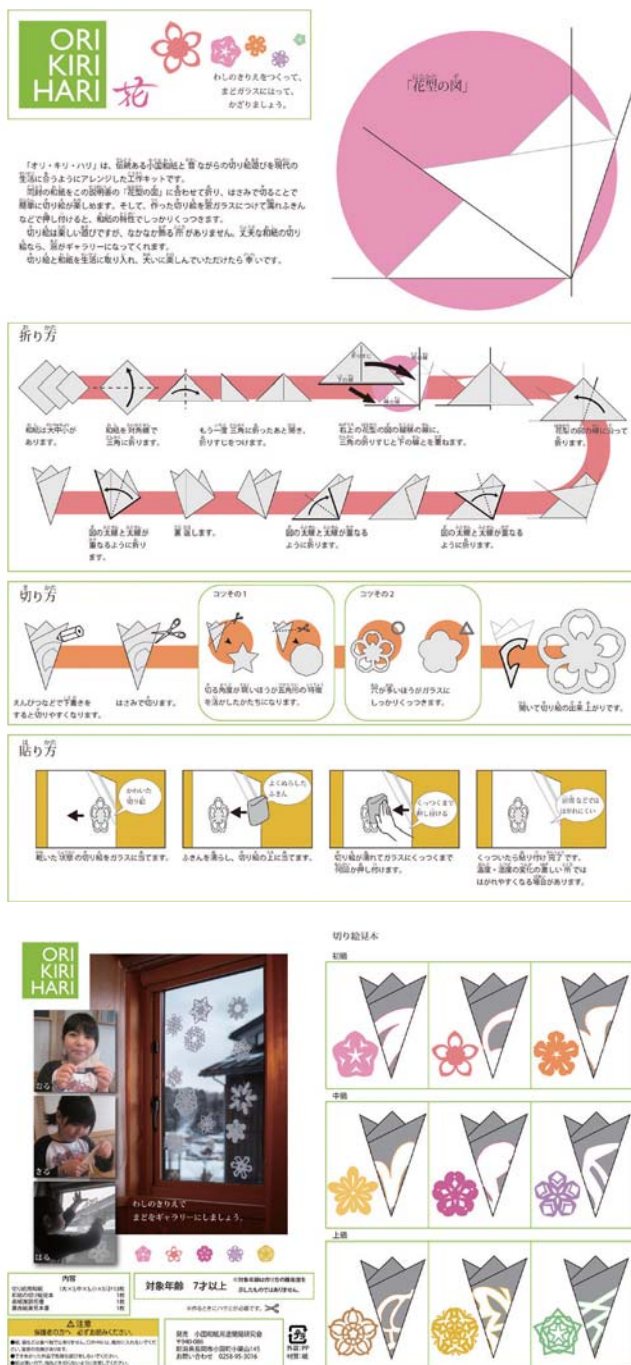


* 窓に貼られたORI KIRI HARI

3. 実際に使用して

学生4名が実際に使用した結果、説明用のイラストや文章に改良の余地があることを指摘されたが、商品そのものについては、「童心に帰る」「知らず知らずの内に夢中になる」などと、概ね好評であった。

以下は改良型の説明書と今回制作した作例が載った裏表紙である。



1. はじめに

長岡市和島中沢の旧島田小学校南校舎、体育館について社会福祉法人長岡三古老人福祉会の依頼に基づき平成23（2011）年に歴史的な建築調査を実施した。ここでは調査によって明らかとなった建物の来歴、建築年代、平面の復原などについて報告する。

2. 旧島田小学校の概要

旧島田小学校は長岡市の和島地域の中沢に位置する。本校は、明治34（1901）年の旧小島谷村、旧村田村の合併により、両村の尋常小学校が統合を受けたことによるもので、名前は、旧村名から1文字ずつをとった。

元々、小島谷校は明治6（1873）年創立で、小島谷2063付近にあったものを明治23（1890）年、日野浦校との統合を機に小島谷1466付近へ移転した。一方、村田校は明治5（1872）年の創立で、城之丘に位置した妙法寺安全坊の一部を用いて開校した。島田小学校の創立は明治37（1904）年4月12日であるが、統合には村田校側の反対があり、両者からほぼ等距離の大字曲田地内字兎河内64に設置し、新校舎は小島谷校から教室部分、村田校から男子室内運動場が提供され、女子運動場及び教室部分が新築された。

今回調査の南校舎及び体育館は昭和2（1927）年7月1日起工である。請負は与板町の中村久次郎とされる。

そして戦後の昭和44（1969）年に北校舎が鉄筋コンクリート造に改築された。なお、島田小学校は平成21（2008）年3月に閉校し和島小学校へ統合された。

3. 旧島田小学校校舎の概要

・配置と形式、規模

旧島田小学校は県道192号線に沿う高台に南面して、敷地は東側に校庭、プールを挟んで西側に鉄筋コンクリート造の北校舎と今回調査を実施した木造の南校舎及び体育館を配する。南校舎は平入棧瓦葺、東妻側を半切妻造、西側を入母屋造の形式とする。体育館は南校舎とはL型に接合し、西側に便所が設けられる。

・平面

南校舎には北面西側の児童出入口から入る。出入口はかつて2口設けられたが、現状で東側は物置として使用されていた。出入口は西側に進むと体育館である。

一方、南側の廊下に出て、矩折に進むと階段で、これを過ぎると廊下は北側に廻り南側に教室3室が配される。西から順に図工室、家庭科室、廊下の突き当たりは音楽室となり、この背面にも東側階段がある。なお、図工室の裏側には旧の高等科入口がある。

2階は階段を登り切ると北側に廊下が通され、教室は階段の西側に2室、東側に3室が配される。両端の部屋は廊下を取り込む。東から順に図書室、4年、3年、コネット室、民具室となる。

体育館へは南校舎の出入口、北校舎の西側から入り、内部は一面の板張で、北側壁面中央に演台が配される。演壇西側には両開き戸が配され、北校舎への階段につながる。演壇の東側には両開き戸の形式を有する小部屋が配されるが、かつては“奉安庫”の名称があった。体育館東側は北寄りに中庭からの入口が設けられ、東面中央には水飲み場、南側には南校舎からの入口が2口接続する。南側は壁面にガラス窓があり、ここに防護を兼ね、梯子状の木製肋木が設けられ、西端間に体育倉庫入口がある。西側は南寄りに出入口があり、中央に便所への出入口が設けられ、他は壁とガラス窓とされる。便所は接続部分を手洗い場として、北側を男子便所、南側を女子便所とする。

・構造

南校舎は土台上に側柱はほぼ1間間隔で通柱を立てる。2階床梁は原則、この側柱間に架けて根太を1.2尺程の間隔で配し、教室－廊下境には頭つなぎを床梁下に通す。小屋組はキングポストとする洋小屋組で陸梁は1材、主要部に火打梁を配する。吊り束は鉄筋で、真束上下を金具で止め、鼻母屋、棟木と母屋4通で、転止とする。なお、後述するように音楽室－図書室部分は増築で、敷梁2通で2階床梁とする。また小屋組は洋小屋とするが陸梁は中央付近で継ぐもので、片側2連のキングポスト、陸梁と柱間には持ち送りを配する。

体育館の基礎は独立基礎上に土台を回し、側廻柱は桁行6.3寸、梁行7寸の長方形断面とする。出入り部の開口部では高さ1尺の梁を架けて銚や金具による補強を行う。小屋組は鋼材のアンクルを用いるもので、キングポストを有するフィンクストラスで、かつ陸梁の中央がやや持ち上がるいわゆるフレンチ形式で、側の柱との間に持ち送りを配する。母屋木材で棟木に片



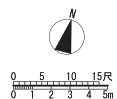
(1) 旧島田小学校全景 南より



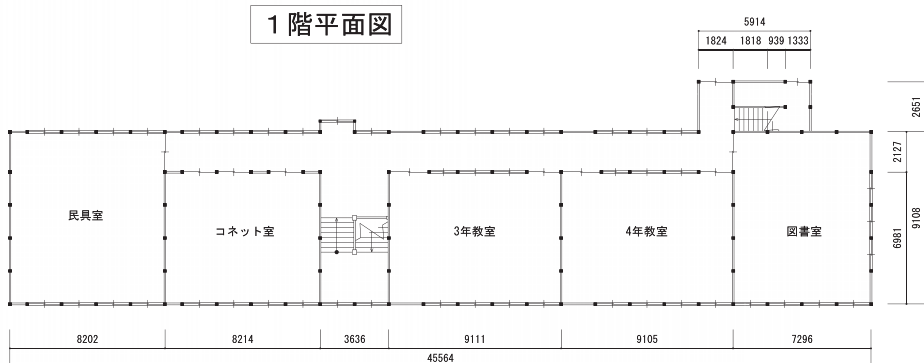
(2) 南校舎 外観 北より



(3) 体育館 外観 南東より



1 階平面図





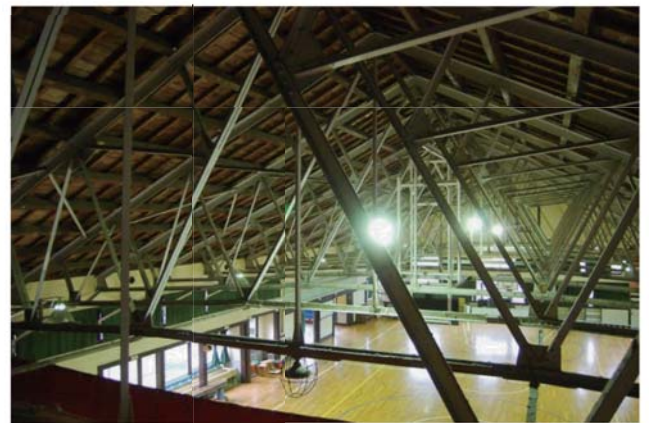
(4) 南校舎 1階階段室 北東より



(7) 体育館 内部 南東より



(5) 南校舎 1階教室 北東より

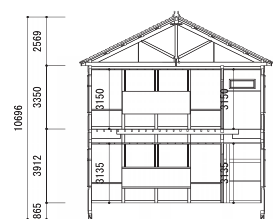


(8) 体育館 内部 北より

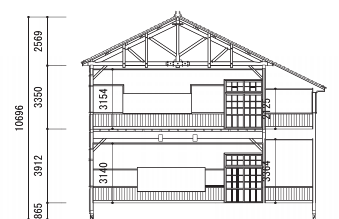
撮影：田村収（1～7）
平山育男（8）



(6) 南校舎 2階廊下 東より



A-A' 梁行断面図



B-B' 梁行断面図



C-C' 断面図

側9通し、垂木も木製で1.5尺間隔とする。

4. 旧島田小学校校舎の復原

・建築年代

南側校舎の建築年代を示す1次資料は建物から見いだされなかったが、開校周年記念誌などによると南校舎の建築は昭和2（1927）年で、起工が7月1日、竣工は12月31日、落成式が翌年5月8日と記録される。東側への増築部分では小屋裏に全長2.72尺の幣串が残っていた。幣串本体は無記名であったが、幣串周囲の奉紙には“祝上棟”とする毛筆の文字が残り、幣串表面下部には“一九四九.一二”とチョークにて記されていた。幣串周辺には児童のチョークによる落書きが数々残されるが、この記名は大人の手によるものと判断できた。空中写真などによると昭和25（1950）年以後に増築が確認されるので、ここでは昭和24（1949）年を増築の年代と考えたい。以後、周年誌などの記載によれば、平成12（2000）年に校舎外周工事が行われた。体育館も建築年代を示す資料は見いだされなかったが、開校周年記念誌などによれば、体育館は南校舎と同様に昭和2（1927）年で起工が7月1日、竣工は12月31日、落成式が翌年5月8日と記録される。以後、昭和48（1973）年に屋根瓦工事の記録が残る。

・建物の復原

当初の平面は1階西側で児童入口が2口、廊下及び階段を挟んで東側では2室とするもので部屋割は現状を踏襲する。2階も教室の間仕切りに変更はない。但し、現状の民具室は入口の敷居が高く、周囲の柱足下に畳寄せ様の材が配されるため、畳を敷き詰めて用いた可能性が高い。作法室のような部屋であったのではないかと考えられよう。2階階段室前の流しは当初なく、痕跡より窓に復される。東妻面は当初の写真や痕跡を参考にすると、中3間が窓、両脇が壁に復される。また、東側階段が取り付く北面東端柱間は窓に復される。屋根は当初の写真を見ると、平面の前後3カ所にドーマーウインドーを見ることができる。これは70周年記念航空写真でも確認でき、空中写真では昭和50（1975）年まで見ることができるため、昭和55（1980）年までには屋根の改修があったとできよう。なお、外周の窓は近年の工事でアルミサッシに改められている

が、当初も上下二段の窓であったことは痕跡から明らかである。なお、昭和24（1949）年の増築では東側に桁行24尺と背面の階段室が増築された。

体育館はよく当初の姿を伝える。ところで聞き取りによれば鋼材の小屋組は戦後の昭和39（1964）年6月の新潟地震に際して被災して改められたものとした。しかし、記録類において島田小学校における新潟地震の被害は北校舎に限られ、校舎落成式典を記録する写真にも鋼材トラスを確認できるため、これらは当初以来のものと考えられる。ところでアングル本体には“(社章)BS3×3 SEITETSUSHO YAWATA ヤワタ”などの陽刻名を確認することができ、鋼材は国産で八幡製鉄所製と判断できた。なお、体育館が半壊の被害を受けたのは近隣では桐島小学校の事例がある。演台には増築の痕跡を確認することができる。当初は、幅18尺、奥行9尺であったものが改造を受けたと見ることができる。改造は演台裏側の墨書から、昭和26（1951）年と判断される。

次に、演台東側の奉安庫について検討を加えたい。島田小学校における独立した奉安殿は昭和15（1940）年、島田村の久須美作之助、池浦隆右衛門、大矢六三郎からの寄付が村会で協議され、翌年7月14日に建物の竣工式が行われた。前後の事情を考慮すると、この奉安殿完成以前に天皇の真影を納めたのが奉安庫であろう。周囲を観察すると当初からの建築であった。

また、建物南側の体育倉庫は、調査時点では長さ5.6m程の規模であったが、閉校直前では10m程の長さを有していた。但し、当初の写真を見ると体育倉庫はない。空中写真を順に確認すると、昭和25（1950）年までには閉校前の姿になっていたようである。

5. さいごに

旧島田小学校の建築調査から以下の点が判明した。

- 1) 南校舎、体育館は昭和2（1927）年建築で、南校舎のドーマーウインドーは昭和50（1975）年から昭和55（1980）年の間に撤去された。
- 2) 南校舎東側の増築部分は幣串にチョークで記される昭和24（1949）年の建築である。
- 3) 2階民具室は作法室に復される。
- 4) 体育館には八幡製鉄所製の鋼材が使用される。

桃山邸調査業務委託

1. はじめに

長岡市福住の桃山邸について社会福祉法人長岡三古老人福祉会の依頼に基づき平成23（2011）年に歴史的な建築調査を実施した。なお、同会ではこの建物について今後の活用などを考える上で、調査を委託したものである。

ここでは建築調査を通して明らかとなった建物の来歴、建築年代、平面の復原などについて報告するものである。

2. 桃山邸の概要

桃山邸は現在、この建物に隣接する社会福祉法人長岡三古老人福祉会が所有に至ったもので、数年前まではH家の所有に関わるものであった。

なお関係者への聞き取りによれば、当初の段階でこの建物は関西地方において建造されたものが、新潟県の新潟市へ移築され、更にこの地へ至ったものと伝聞されるとする。

3. 桃山邸建物の概要

・配置と形式、規模

桃山邸はJR長岡駅東口から徒歩数分となる場所に建つものである。敷地の東隣は公道を挟んで福島江が流れ、これに沿っては桜の並木が植えられている。周辺は長岡駅を挟んで繁華街となる大手口（西口）の反対側に位置するもので、歴史的にも閑静な環境を形成している。

敷地の広さは東西が30m、南北が30m程となり、住宅地としてはやや広いものとなる。敷地中央に主屋が配されており、東側の公道に対して南寄りに玄関、北寄りに台所口を開き、この東側に物置を置く。玄関前には植栽があり、敷地の北側に本格的な庭を設けている。

主屋は木造一部2階建、2階部分は鉄板葺で西側を切妻造、東側を入母屋造とする形式である。1階部分は、居室部分をいずれも入母屋造鉄板葺とし、台所は寄棟造棧瓦葺、風呂部分は切妻造棧瓦葺とするものである。

・平面

主屋の玄関は東向きで、西側に4畳の寄付き、裏が8帖広さの洋風応接室で、玄関の北側に小窓を挟んで、

配膳室を兼ねた下足場を設ける。中廊下が寄付き裏から鉤の手に置かれ、その周囲に部屋が配される。なお、中廊下は応接室前が畳敷き詰め、以後は畳を長手に敷き、1尺程の幅で板敷を設ける形式である。折れ曲がった廊下に沿い南から床柱を松材とする8帖、4帖の仏間、2帖の床の間を持つ10帖が広がり、8帖裏に便所が取り付く。8帖の向かいには階段を挟んで南6帖、10帖向かいには北6帖となり、10帖と北6帖の前に、北庭に臨んで畳み敷で一部板敷の廊下が配される。そして、これらの北東側に台所、板敷の廊下がのびて風呂、便所が置かれる。

2階は階段を上るとトの字形に廊下が配され、西側が南北に8帖2室の続き座敷で、北側8帖の床柱が竹材となる。階段際の南東が4帖半で三角形の置床、北東が4帖となる。

なお、各室の構成では寄付き、2階座敷などにおいて竹材の使用が目立った。

・構造

建物は主要部をコンクリート製布基礎、応接室下は切石の布基礎とし、周囲の廊下は切石独立基礎とするものであった。

2階の小屋組は京呂組による和小屋組で、敷梁を続座敷上で2本、他の箇所では1本を通し、隅部に火打梁を配していた。なお小屋材は梁、束とも転用古材が多く用いられる一方、母屋材の一部には杉丸太が用いられていた。

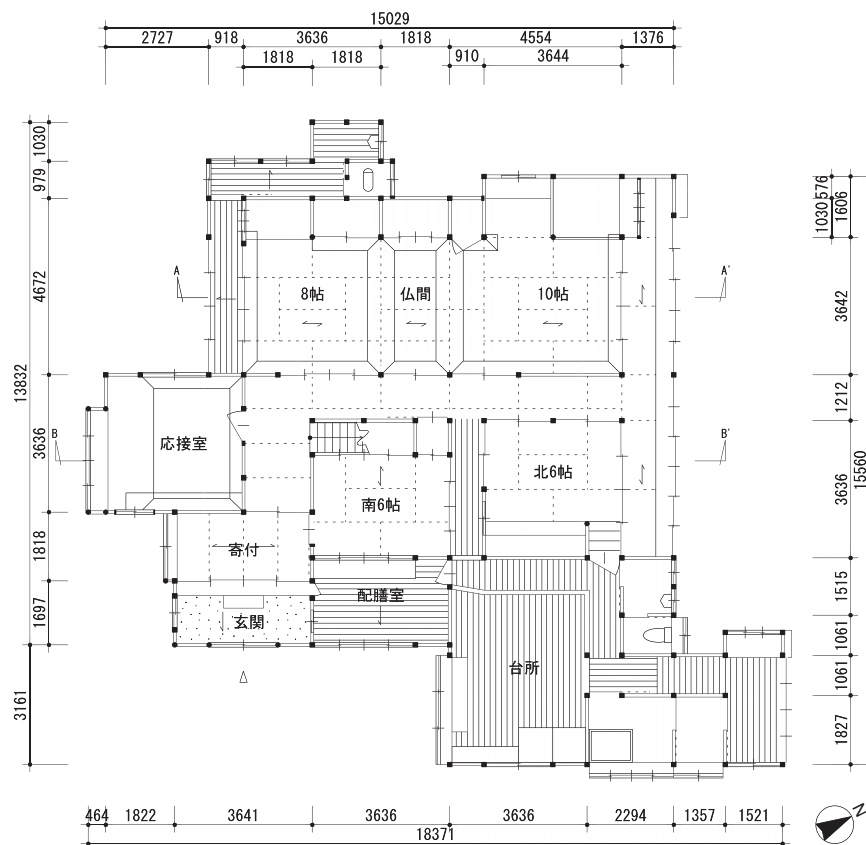
また、土壁の下地材は篠竹で組むもので、これを柱内側に打ち付けた竹釘に縄で縛り付ける工法を採っていた。

4. 桃山邸主屋に見られた墨書類や番付

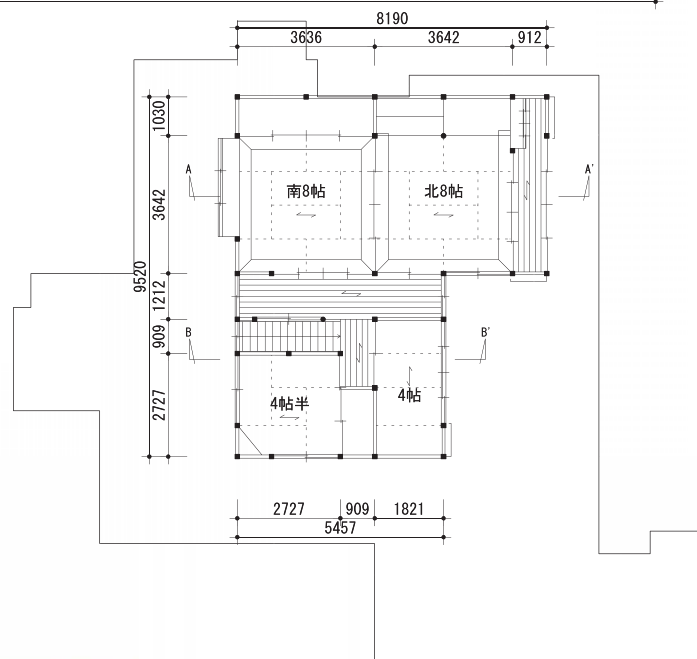
桃山邸の各所からは墨書及び番付が発見された。以下にその概要を記す。

・墨書類

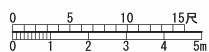
各部屋における建具の上端を見ると毛筆による墨書を確認することができた。部屋毎に見ると、寄付きの建具には「ロ」、応接室には「ハ」、8帖に「ニ」、仏間は「仏間」、10帖に「へ」、2階南8帖に「ト」、北8帖に「チ」の墨書を見ることができた。但し、1階北6帖、6帖、2階4帖半、4帖ではこの墨書を見るこ



1 階平面図



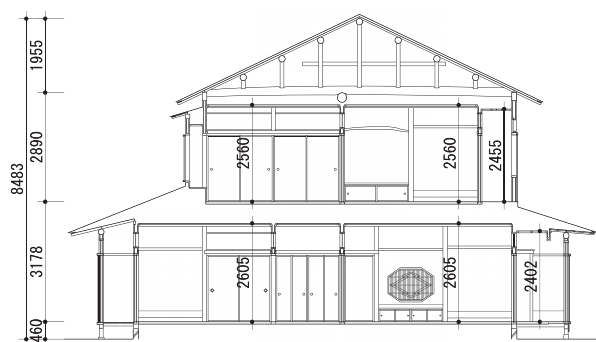
2 階平面図



外観 東より



外観 南より



A-A' 梁行断面図



B-B' 梁行断面図



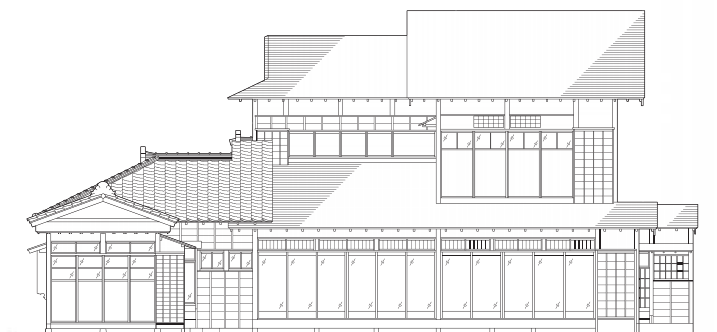
10帖 北より



東側立面図



応接室 南東より



北側立面図



西側6帖 北東より



2階西側8帖 北より

撮影：田村収

とができなかった。また、応接室棚天板裏面には「応接室地袋」、10帖書院地袋には「出マド」の記載を見ることができた。

一方、主屋北東角、切妻造となる風呂場の鬼瓦背面には「ヤスダ／ワタナベ」（／は改行）の刻銘を見ることができた。

・番付

2階小屋裏では廊下と8帖部屋境筋で南側の桁から3尺の位置に建つ小屋東北側には「と七」の番付が見出された。他の記載と照合すると、桁行1階西側下屋筋が「い」で、3尺間隔で以下、「ろ」「は」と進み、梁行は応接室南側の桁筋を「一」、以下3尺間隔で「二」「三」と進む、いろはと数字の組合せ番付であることが確認された。

5. 桃山邸建物の復原

・建築年代

建築年代を直接示す1次資料を見出すことはできなかった。なお、2階4帖半上には、無記名であったが長さ2.705尺、上部を駒形に整形した幣串が妻小屋梁の西側に洋釘止めされていた。

また、2階南側8帖の押入襖裏張りには大正9(1920)年の記載を持つ反故紙を見出すことができた。この反故紙について、記載の内容から判断すると、この用紙は新発田の運送会社における伝票であったことが判明した。

一方、長岡市は昭和20(1945)年8月1日、第2次世界大戦における空襲を受け、中心市街地は灰燼に瀕している。被災の範囲について、被災を記録した地図や、終戦直後の段階で駐留アメリカ軍によって撮影された空中写真を詳細に確認して行くと、桃山邸の敷地における建物は空襲により焼失したことを確認することができた。

以上の事柄を総合的に勘案すると、今回調査した桃山邸主屋が当該の敷地に建築された時期は第2次世界大戦後になってからのこととするのが妥当と見ることができる。

また、後述のように主屋建物について移築の可能性を否定することはできなかった。但し、建物から和釘の使用を認めることはできなかったことから、新潟に

おける建築年代の上限は、反故紙の内容などから大正時代後期頃とするのが妥当であろう。

・建物の復原

当地における建物の改変は

①風呂場部分の増築

②台所部における隔壁の設置

③応接室の入口が引違から開き戸の扉へ改造

などの点が挙げられるが、その他では目立った痕跡は確認されなかった。

全体的な構成を見ると、2階部分と金属板葺の入母屋部分が比較的古いようである。しかし、棧瓦葺となる台所部分は金属板葺部分で屋根の勾配も他の部分とは異なり、片流れとなる配膳室も仕事がやや下る印象を受けた。但し、2階入母屋部分は勾配が5/10とやや急な印象も受ける。

主要室建具に見られた墨書は、障子に限らずガラス窓からも確認されたことから、障子紙の張り替えに際してのものではなく、移築時の符牒的なものとするのが妥当であろう。

以上、番付、墨書類などとの整合性をも考えると建物の主要部分は移築を受けたとしてもかなり忠実に建築がなされているといえよう。

一方、建物の東側の台所回りは屋根勾配が他の箇所とは異なるなど、移築に際しての改造があったと考えるのが妥当であろう。

6. さいごに

長岡市福住の桃山邸の調査から明らかになるのは以下の諸点である。

- 1) 桃山邸の新潟における建築時代は建物から和釘の使用は認められないことから大正時代後期頃とするのが妥当であろう。長岡への移築時期は第2次世界大戦後の昭和時代戦後期であろう。
- 2) 主屋の小屋組からはいろはと数字の組合せ番付が見出され、これは現状の規模に合致する3尺間隔のもの確認された。
- 3) 主要室の建具上端からは「ロ」から「チ」の墨書が確認され、これらは移築時の符牒と考えることもできた。

1. はじめに

長岡造形大学では、平成14～16（2002～04）年度にかけ、長岡市からの依頼で旧長岡市内における歴史的建造物の悉皆調査を実施し、平成18（2006）年には旧長岡市域から10件の国登録有形文化財を出すに至った。

一方、長岡市は平成18（2006）年度までに栃尾市など周辺9市町村と合併したため、平成19（2007）年度からは旧長岡市域以外における歴史的建造物の悉皆調査の実施が長岡造形大学に委託された。

平成23（2011）年度は、旧三島町、旧川口町地域において歴史的建造物について悉皆調査を行った。日程は平成23（2011）年7月から9月にかけて現地調査を実施したものである。調査の方法は住宅地図に基づき、公道より望見できる範囲内で当該地域における全ての建造物を確認の上、概ね建築後50年を経た建物を中心として写真撮影を行い、一部で聞き取り等を実施し、建築構造などを項目とした調書を記録として作成した。

調査対象物件は三島地域2,200件程、川口地域1,500件程の合計3,700件程で、このなかから三島地域で194件、川口地域で70件の歴史的建造物などを確認した。

なお、平成24年度日本建築学会北陸支部において以下の報告を実施している。

- ・西澤哉子・平山育男：長岡市三島・川口地域における茅葺民家について長岡市歴史的建造物悉皆調査（12）
- ・西澤哉子・平山育男：長岡市三島・川口地域における真壁造の土蔵について長岡市歴史的建造物悉皆調査（13）
- ・西澤哉子・平山育男：長岡市三島・川口地域において幣串を妻面に有する歴史的建造物について長岡市歴史的建造物悉皆調査（14）
- ・西澤哉子・平山育男：長岡市三島地域における木倉（米小屋）について長岡市歴史的建造物悉皆調査（15）

2. 三島・川口地域における茅葺建物

・茅葺建物の分布

三島地域では5棟、川口地域では6棟の茅葺建物が確認された。

三島地域では茅を露出するものは長岡市指定文化財である寛益寺山門の1棟で、他はいずれも金属板で被

覆するものであった。また、6棟の内、3棟が宗教系の建物であった。

川口地域では1棟が茅を露出するものであったが、これ以外は金属板を被覆させるもので、6棟の内3棟が宗教系の建築であった。

三島地域は東部の平野部と西部の丘陵部から形成されるが、山丘陵際に位置する、成立の古い集落部や山間部の集落に茅葺建物の点在することが確認される。

川口地域は信濃川と魚野川の合流する平野部とそれらを取り巻く山間部からなるが、茅葺建物は宗教建築を中心として茅葺建物を確認することができた。

・出現率

三島、川口各地域における茅葺建物の出現率を見たい。分母は各地域における平成24（2012）年2月1日現在の世帯数として見たものである。これによれば三島地域における茅葺出現率0.2%と、低い数字となる。一方、川口地域の茅葺出現率も0.4%と低い値となる。特に川口地域においては平成17（2005）年の中越地震において多くの歴史的建造物が失われており、その影響がこの数字に反映されているようである。

・小 結

長岡市三島及び川口地域における調査において、三島地域では5棟、川口地域では6棟の茅葺建物を確認することができた。三島地域の茅葺出現率0.2%、川口地域が0.4%といずれも極めて低いものであった。

3. 三島・川口地域における真壁土蔵

真壁造の土蔵とは、①外部から望見できる範囲で軸組までを柱外面で納め、梁組以上の鉢巻部分は大壁とする形式、②鉢巻部分のみを塗込めて大壁形式とする、③隅柱以外を大壁とする形式、の3種類に分類することができる

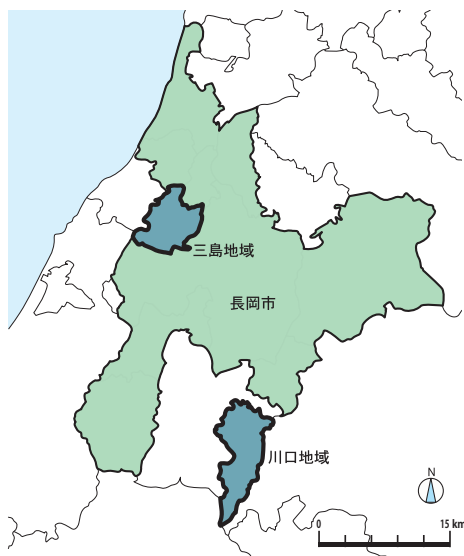
・真壁土蔵の数量

三島地域では2棟の真壁土蔵を確認したが、2件とも②の鉢巻部分のみを真壁造形式とするものであった。

一方、川口地域において真壁土蔵を確認することはできなかった。

・真壁土蔵の分布

真壁土蔵は三島地域における2件は、いずれも三島地域西側に控える丘陵地域の東側裾に点在する旧村部



三島 寛益寺山門



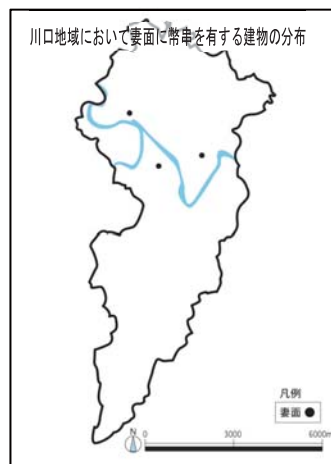
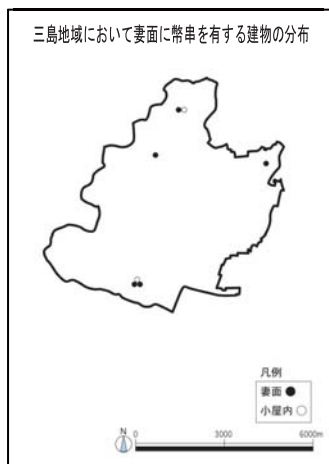
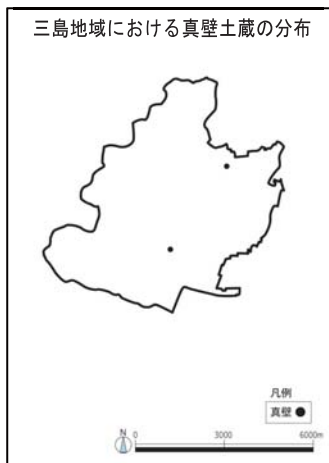
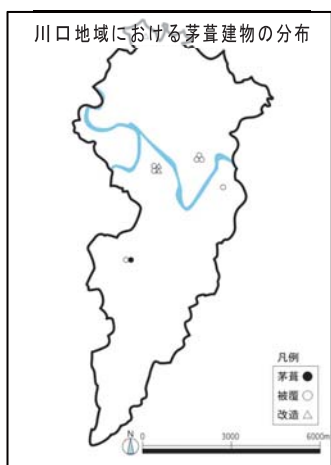
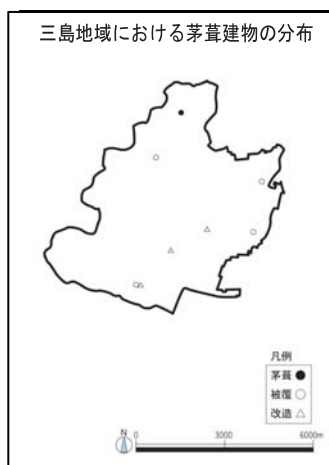
三島 NG家住宅主屋



川口 FM家住宅主屋



川口 西蔵院稲荷社





三島 UM家土蔵



川口 FM家住宅倉庫



川口 KT家住宅主屋



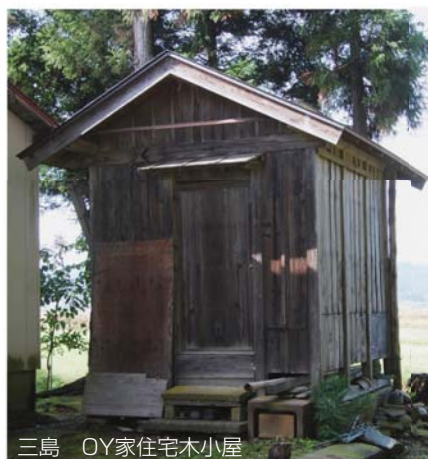
三島 SB家住宅主屋



三島 TS家住宅木小屋



三島 KS家住宅主屋



三島 OY家住宅木小屋



OY家住宅木小屋 内部

分に点在するものであった。

これまで長岡市の悉皆調査において真壁土蔵は、寺泊、和島、中之島地域において確認しており、これに三島地域が数量は少ないが加わるることとなる。

ところで、この真壁造土蔵は新潟県下においては長岡以北となる県央の三条及び下越地方などの地域においても散見することができる。

・小 結

長岡市三島地域における建造物の悉皆調査において真壁造の土蔵2棟を確認することができたが、川口地域で確認することができなかった。このため真壁土蔵は長岡市三島、中之島地域付近を南限に、新潟県央及び下越地方に分布する形式と想定することができよう。

4. 三島・川口地域において妻面に幣串を有する建物

この地域では切妻造の主屋、納屋など妻面に幣串を打ち付ける建物を見ることができた。三島地域では5棟、川口地域では3棟確認された。なお、妻両面に幣串を配するものは確認されなかった。

三島地域における内訳は納屋・倉庫1棟、主屋（農家）3棟、主屋（商店）1棟となる。なお、三島地域鳥越の日枝神社舞殿では小屋組内部に幣串を発見した。

川口地域では寺院1棟、主屋（商店）1棟、町家1棟であった。なお、寺院は川口中山の林興庵本堂であるが、この建物は茅葺（鉄板被覆）であるが、正面隅木を受ける火打梁を支える柱正面側に幣串が打ち付けられていた。また、町家は聞き取りによれば職業は大工職を営むもので、妻面には幣串の他に、いずれも木製の鏡、剣、破魔矢なども飾られていた。

・妻面に幣串を有する建物の分布

以上のように、長岡市三島及び川口地域において数は少ないものの、建物妻面に幣串を配する建物を見ることができた。なお、このような事例は三条市中心市街地、長岡市栃尾表町、同与板地域、同和島地域、中之島地域、柏崎市高柳地域においても確認している。

・小 結

長岡市三島地域、川口地域における建造物の悉皆調査において三島地域では5棟、川口地域では3棟、計8棟の幣串を妻面に持つ建物を確認した。

建物の種類は納屋・倉庫1棟、主屋（農家）3棟、

主屋（商店）2棟、町家1棟、寺院1棟であった。

5. 三島地域における木倉（米小屋）

木倉とは農家の住宅敷地内に置かれる倉で、主屋からはやや離して配される。木倉の顕著な特徴は土間使用ではなく、木製の床を比較的高い位置に配することである。なお何件かに聞き取り調査を行ったが、建物の呼称は「木倉」、「米倉」、「テンジン倉」とするとの回答を得た。

・木倉の数量と特徴

三島地域においては22棟の木倉を確認した。木倉の規模は梁行1間に桁行1間半とするものが11件と全体の半数を占めた。次いで梁行1間半に桁行2間とするものが5件である。全体としては小規模である。22件中、2階建とするものが3件で残りの19件は平屋建であった。また、22件中、妻入とするものが16件、平入が6件で、妻入の方が多い。葺材は7件が金属板、15件が瓦葺とするものであった。

・木倉の分布

木倉は三島地域の内、瓜生に8件、下河根川に4件、三島新保に3件、脇野町に2件、三島中条に2件、上岩井に3件の合計22件である。地域内でこれらの建物が分布するのはいずれも三島地域において西側に控える丘陵の東側に広がる平野部である。

・小 結

長岡市三島地域の建造物悉皆調査において、平野部で木倉22棟を確認した。木倉は「米倉」、「テンジン倉」とも呼称されることもあり、床を高い位置で張る点が特徴である。規模は梁行1間に桁行1間半程度が多く、多数が平屋建で妻入の形式であった。

6. さいごに

三島、川口地域において茅葺民家を確認することができたが、川口地域は少数に留まった。真壁土蔵はこれまで長岡市域においては寺泊、和島、中之島地域において確認していたが、三島地域でも見ることができ、三島地域では木造の木倉も確認することができた。更に、建物の妻面に幣串を掲げる建物は三島、川口地域でも確認され、今後とも継続的な調査の必要性を痛感した。

1. 業務の背景と概要

長岡市西部丘陵東地区文化・教育ゾーンは、平成10年3月に長岡市で策定された「長岡市西部丘陵東地区土地利用ビジョン」において、新潟県内及び近隣県も含めた広域的集客力を有する文化・教育の交流拠点を土地利用のコンセプトとし、現在整備されつつある。そして、先行して建設された新潟県立歴史博物館、長岡市馬高縄文館という歴史文化施設に加え、平成24年4月にオープンする新潟県動物愛護センターを含めて、これらの教育的要素を持つ施設が相互に連携し相乗効果を生み出すことを目指している。このような背景から、長岡市においては文化・教育ゾーンに建設される「動物愛護センター」に隣接する2つの市有地（東側8,374㎡、西側3,862㎡）の整備方針について検討する「長岡市西部丘陵東地区文化・教育ゾーン活用検討会議」が設置された。この検討会議は、(財)日本動物愛護協会常任理事相田保彦氏を座長とし、副座長に上野が参加、その他周辺の歴史文化施設関係者、長岡市内の動物愛護関係者、農協関係、地元代表等から委員が構成され、合計4回の検討会議が実施された。なお、動物愛護センターは、新潟県が人と動物のふれあい拠点施設の整備を目指すもので、犬、ネコを中心としたペットの飼育に関する教育、動物愛護思想の普及啓発、里親の斡旋などをおこなうもので、殺処分施設ではない。

本業務は上記検討会議の終盤において、検討会議意見の集約を図るため、それまでに出た意見を取りまとめながら基本構想レベルでイメージ図を作成したものである。

2. 計画の内容

整備内容については様々な意見が出たが、基本的には動物愛護センターを中央に置いた両サイドの土地であることから、ドッグランやドッグ競技（アジリティー、フリスビー・ドッグなど）のできる広場を求める意見のほか、周辺の歴史文化施設に関連したイベントや農業関係イベントなど多様なイベントへ対応できる広場整備、さらに周辺の散策のための拠点整備などの意見が出された。これらの意見を集約したものが図に示す整備イメージで、概略次のような内容となっている。

a. 東側広場

有効60m×40mの芝生広場を中心として緩やかな築山とさくらの列植が取り囲む多目的広場。この場所では訓練された犬によるアジリティーなどの競技（地区大会程度）が行えるほか、様々なイベント広場として利用できる。また、築山の上からは東側に守門岳、長岡市内を遠望することができる。なお駐車場42台程度を備えることとした。

b. 西側広場

大小2つ（大型犬用、中小型犬用）のドッグランを配置する。また中央に休憩所および西側端部に西山丘陵や青葉台住宅地などを望む四阿などを設置する。これらは常設のドッグランで、動物愛護センターと連携し、動物とのふれあい拠点の一部として位置づけられる。

c. 計画地の西部、北部

本計画の対処外の土地であるが、地元関原町（NPO法人関原ぬかやま会）と石油資源開発(株)が一部すでに維持管理している土地であり、本計画地と一体となって、里山の保全や自然環境の学習、一般市民の散策、犬を連れての散策など、積極的に活用すべきエリアとして設定した。

受託事業名：

摂田屋地区まちづくり事業計画策定業務

発注者：長岡市

受託期間：平成23年10月17日～平成24年3月23日

プロジェクト主査：渡辺誠介（建築・環境デザイン学科 准教授）

プロジェクトメンバー：渡辺雅洋、江口祐美、五十嵐隆宏、白倉幸歩（以上、学部学生）

1. はじめに

本業務は、これまで4年間長岡造形大学デザイン研究開発センターとして受託してきた一連の摂田屋のまちづくり支援プロジェクトにおいて、持続性という意味で画期的な試みを実施したものになった。

それは、本学の学部共通選択授業である「地域共創演習」のプログラム「摂田屋こへび隊」プログラムと連携をとったことである。これまで、渡辺研究室の卒業研究と連携をとることはあったが、それでは、卒業研究テーマに摂田屋を選ばない学生が多くなった際に、まちづくり事業を推進する強力な要素の一つとなりつつある学生のまちづくり参加が極めて限定的になる危険性を含んでいたのである。

そこで、委託事業が開始される以前に実施された、「摂田屋こへび隊」プログラムの主な活動を紹介する。

4月18日 摂田屋地区まちづくり協議会参加

5月28日 町内会 摂田屋公園草刈り
+アンケート調査



6月4日 抜い樽隊（草刈りボランティア）夏の陣



7月1日 ミニ鰻絵教室in上組小学校



7月5日 まちかどアートワークショップ



7月12日 上組小学校灯り作りワークショップ



7月15日 ミニ鰻絵教室in上組小学校



8月26日 三国街道灯りイベント



11月5日 抜い樽隊（草抜きボランティア）秋の陣



2. 見てきた三国街道および摂田屋公園整備の要望

以上のような活動を通し、地域住民のみなさんから信頼を受け、地域整備に関する率直な意見を集めることにした。

その結果、三国街道の越のむらさき周辺は、アスファルト舗装の劣化が進んでおり、竹駒稲荷の祝祭空間として、適切な整備が必要という意見が抽出された。また、摂田屋公園のトイレについても地域のイメージに合った整備が必要との声が上がった。

【三国街道提案例】



①土舗装案



②石畳と道絵案

3. 摂田屋デザインコンペティション(摂田屋総選挙)

前項の調査結果を受け、三国街道および摂田屋公園(トイレ)に対して、5案ずつ提案し、それを地域住民の皆さんに評価・投票するイベントを実施した。

日時：平成24年2月4日～13日

場所：星野本店



③灯りを活かす案



④黒石畳案

三国街道

—懐かしき三国街道—

三国街道は江戸と越後を結ぶ、江戸の五街道に次ぐ重要な道でした。そんな道だからこそ、三国街道を歩くとにんだか懐かしい気持ちになる。そんな思いを込めて道路の整備を行います。

新しい舗装材は主に石畳。石畳は神社や公園、家の庭など幅広く使用されています。石畳で懐かしいような雰囲気を演出していきます。すべてを石畳で覆ってしまうのではなく、一部を新しい舗装に換装することによって、塗りよめの効果を目指します。



道路の他灯には地上1m程度の照明灯を提案しました。人との距離が近く、またも雨陰で覆われることがないからです。常夜灯の側には設けた人が休憩できるようにベンチを設けました。



伊田屋の名前の由来として中世のころ、徳川や立派の無類修験のことに「伊田屋」と呼んでいたことからも分かります。昔から三国街道沿い、街道の交わる場所に位置した事と、水質が高く豊富な事から、醸造業が盛んな地域となりました。そこで、伊田屋にちなんでベンチを設けることによって通行人々の憩いの場となります。歩いたり、見たり、座ったり、通行人々に楽しんでもらえたらなあ、と思います。

高岡大学 大井・多田

【三国街道 最優秀案 上記】

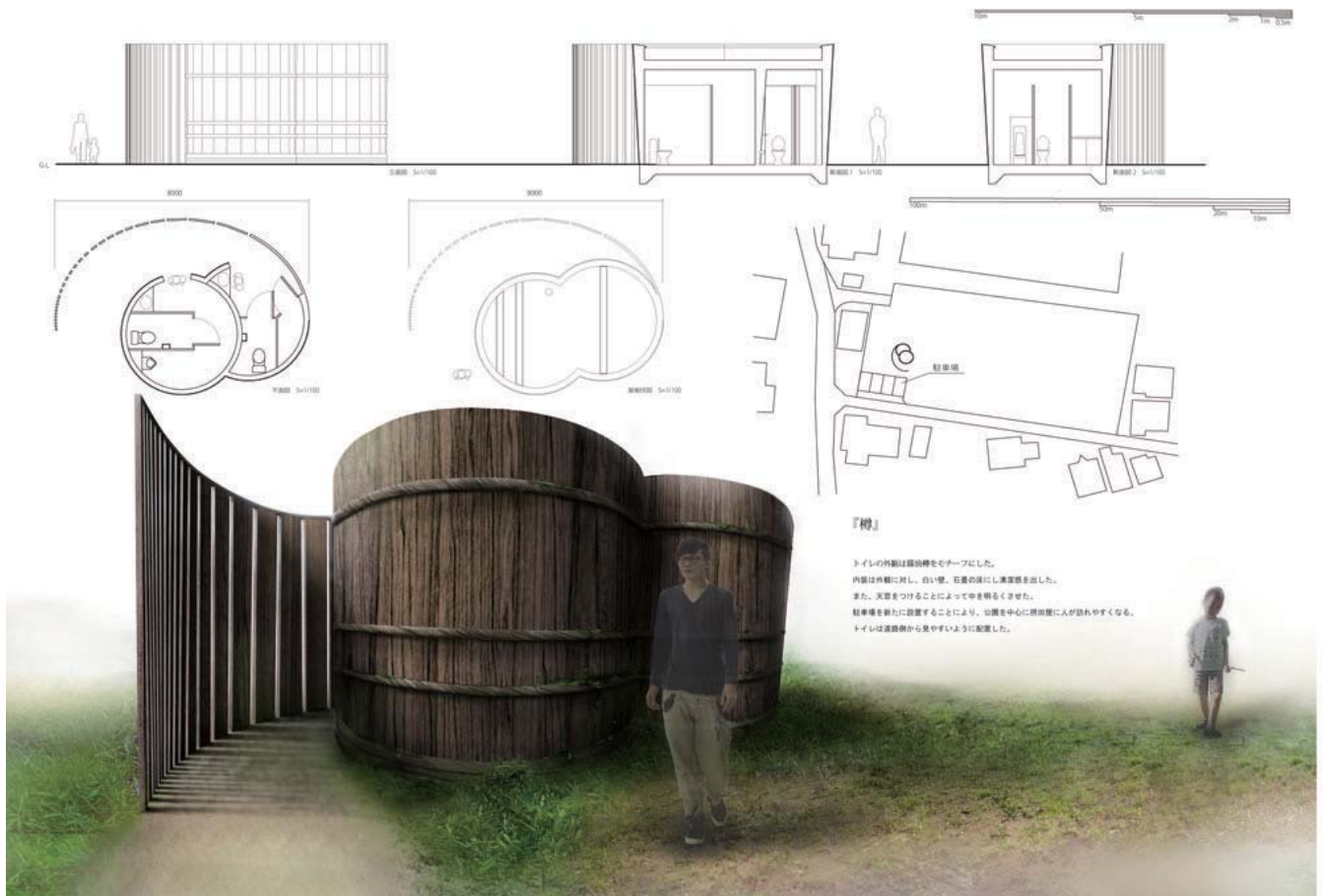
本提案は、石畳提案であるとともに、休憩スペースを取り入れたものである。伊田屋地域の皆さんが、三国街道を歩行者優先の歩行空間および交流空間として期待していることが分かる。

ただし、現在の三国街道では道路幅員として求められる4mぎりぎりの箇所が多く、事実上こうした整備には限界がある。しかしながら、通常は車道空間として活用でき、祝祭空間としての活用にも耐えられるような空間として、地域住民が期待していることが明らかになった。

今後は、維持管理を簡易にしつつ、上記のような期待に応えられるような設計に入ることが望まれる。

【伊田屋公園 最優秀案 右頁上】

本提案は、伊田屋が醸造の街であり、そのシンボルとして樽を実際に展示したり、樽をモチーフにしたものである。合わせて、駐車場スペースを提案したことも評価につながった。今後は公共トイレとしての通り抜け性などを上げる改良が望まれる。



4. コンペに基づいた住民意見交換

摂田屋コンペティションの投票結果から、①三国街道の舗装材、②三国街道に休憩ゾーンは必要か、③公園のモチーフは樽でいいのか、④公園に東屋や駐車場は必要か、⑤事業の計画案の優先順位、の5点について意見交換を行なった。

トイレ案については、食品を扱う樽をモチーフにするのはいかなものかとの危惧も出されたが、結果として、提案内容についてはほぼ賛成であり、後は、具体的整備実施を要望することとなった。

平成24年3月11日 摂田屋公民館



デザインの産学連携を推進、地場産業の新製品企画に寄与

デザイン研究開発センターは、平成6年の長岡造形大学開学と同時に大学の附属機関として発足しました。本学の教育研究成果を広く企業等に伝え、企業等との共同研究を推進することにより、本学の教育研究の発展と地域社会における創造的研究開発の推進に寄与することを目的としています。

センターでは、寄せられたデザイン相談の内容に応じて様々なメニューを用意しており、長岡造形大学の全教員が各自の専門・研究分野の特性に応じて、プロジェクトに関与します。

1. 相談受付から業務終了までのフロー

デザイン相談の受付

デザインに関する相談は、電話・FAX等で長岡造形大学総務企画課にて随時受け付けています。

電 話

▷ まずはお気軽にお電話ください。TEL 0258-21-3311(代)

FAX・Eメール

▷ 「デザイン相談申込用紙」にご記入いただきFAX又はEメールにてお送りください。

FAX 0258-21-3312

Eメール kikaku@nagaoka-id.ac.jp



内部協議 ～ 両者打合せ

頂いたご相談内容をセンターで把握し、打合せにて詳細内容を再度お伺いいたします。
その後、ご相談内容に沿った最も適切な方策をご提案いたします。以下が主なメニューとなります。



①受託研究・委託によるデザイン提案

委託契約に基づき、担当する教員が調査研究又はデザインを提案いたします。メンバーには学生も参加します。

②外部デザイン事務所の紹介

ご相談内容に応じて外部デザイン事務所を紹介いたします。

③学生コンペ

学生に広くデザイン案をお求めの場合は、本学学生を対象に学内コンペを行ないます。

④教員による専門的アドバイス等

デザイン全般に関して専門的知見からアドバイス及びコンサルティングをいたします。



「①委託によるデザイン提案」の場合、以下のとおり業務が進行いたします。

主査の決定 ～ 業務委託契約

ご相談内容に応じて本学教員の中から適任者（主査）を決定します。
業務の方法、期間、予算等について、両者で協議を重ね、業務委託契約を締結し、業務がスタートします。
ただし、授業その他の学事が優先されますのでご了承ください。



成果物の提出・業務終了

成果物を提出し、委託元の検収後、業務終了となります。

2. プロジェクト担当教員

 学長・教授 和田 裕 専門分野 プロダクトデザイン	 教授 天野 誠 専門分野 グラフィックデザイン	 教授 石原 宏 専門分野 西洋美術史	 教授 上野裕治 専門分野 ランドスケープデザイン	 教授 江尻憲泰 専門分野 建築構造
 教授 大森 修 専門分野 言語技術教育	 教授 川口とし子 専門分野 建築・インテリア・ プロダクトのデザイン	 教授 菅野 靖 専門分野 金属工芸（彫金）	 教授 木村 勉 専門分野 建造物保存修復	 教授 後藤哲男 専門分野 建築・都市設計
 教授 境野広志 専門分野 プロダクトデザイン	 教授 菅原 浩 専門分野 表象文化論、比較文化論	 教授 鈴木均治 専門分野 テキスタイルデザイン（染色）	 教授 土田知也 専門分野 プロダクトデザイン	 教授 長瀬公彦 専門分野 グラフィックデザイン
 教授 長谷川博紀 専門分野 グラフィックデザイン	 教授 馬場省吾 専門分野 金属工芸（鍛金造形）	 教授 原子 カ 専門分野 マンガ	 教授 アンドリュー バン ゴーサム 専門分野 TESOL（英語教授法）	 教授 飛田範夫 専門分野 遺跡保存
 教授 平山育男 専門分野 建築史	 教授 ヨールグ ビューラ 専門分野 映像、マルチメディア	 教授 堀田 正 専門分野 彫刻	 教授 松本明彦 専門分野 写真	 教授 森 望 専門分野 ディスプレイデザイン
 教授 森田 守 専門分野 意匠法	 教授 山下秀之 専門分野 建築意匠・建築設計	 教授 結城和廣 専門分野 美術科教育	 准教授 岡谷敦夫 専門分野 油彩、版画	 准教授 金澤孝和 専門分野 プロダクトデザイン
 准教授 川越ゆかり 専門分野 服飾デザイン	 准教授 吉川賢一郎 専門分野 グラフィックデザイン	 准教授 小林花子 専門分野 彫刻	 准教授 澤田雅浩 専門分野 都市計画、都市防災	 准教授 中村和宏 専門分野 ガラス工芸
 准教授 長谷川克義 専門分野 金属工芸（鋳金）	 准教授 真壁 友 専門分野 メディアアート	 准教授 御法川哲郎 専門分野 イラストレーション	 准教授 渡辺誠介 専門分野 都市計画、 観光まちづくり	

※職名及び専門分野は、
平成24年4月1日現在

長岡造形大学
デザイン研究開発センター
TEL 0258-21-3311
FAX 0258-21-3312
E-MAIL kikaku@nagaoka-id.ac.jp

				申込日	平成	年	月	日
申 込 者	企業名等							
	住 所	〒						
	T E L		F A X					
	ご担当者		部署／役職					
	E-mail		U R L					
デザイン 相談分野 (複数回答可)		プロダクトデザイン			建築・環境デザイン			
		☐ 産業機械 ☐ 電化製品 ☐ I T 機器 ☐ 日用品 ☐ 雑 貨 ☐ 乗り物 ☐ ファッション ☐ その他			☐ 建築設計 ☐ 空間デザイン ☐ インテリア ☐ 景 観 ☐ 調 査 ☐ 計 画 ☐ イベント ☐ その他			
		視覚デザイン			美術・工芸			
		☐ 広 告 ☐ ロゴマーク ☐ アニメーション ☐ WE B ☐ C I ☐ パッケージ ☐ 写真・映像 ☐ その他			☐ 絵 画 ☐ 金属工芸 ☐ ガラス工芸 ☐ 彫 刻 ☐ テキスタイル ☐ オブジェ ☐ 木彫品 ☐ その他			
内 容								
業務の形態 (複数回答可)		☐ 教員によるデザインワーク ☐ 学生コンペ ☐ 学生によるデザインワーク ☐ その他 () ☐ 外部デザイン事務所等の紹介 ☐ わからない						
期 間 (スケジュール)		開始時期： (製品化予定、販売予定等) 終了時期：						
ご 予 算								
備 考								

受 付 日	平成 年 月 日	受 付 者	
-------	-------------------------	-------	--

長岡造形大学デザイン研究開発センター 平成23年度活動報告

発行日：平成24年 7 月13日
発 行：長岡造形大学デザイン研究開発センター
940-2088 新潟県長岡市千秋 4 丁目197番地
T E L：0258-21-3311（代表）
F A X：0258-21-3312
U R L：http://www.nagaoka-id.ac.jp/
E-mail：kikaku@nagaoka-id.ac.jp

表紙デザイン：御法川 哲郎

本書の図版及び文章の無断転載を禁じます。
Copyright©2012 Nagaoka Institute of DesignAll rights reserved.

※長岡造形大学デザイン研究開発センターのこれまでの
活動報告については上記URLからもご覧いただけます。